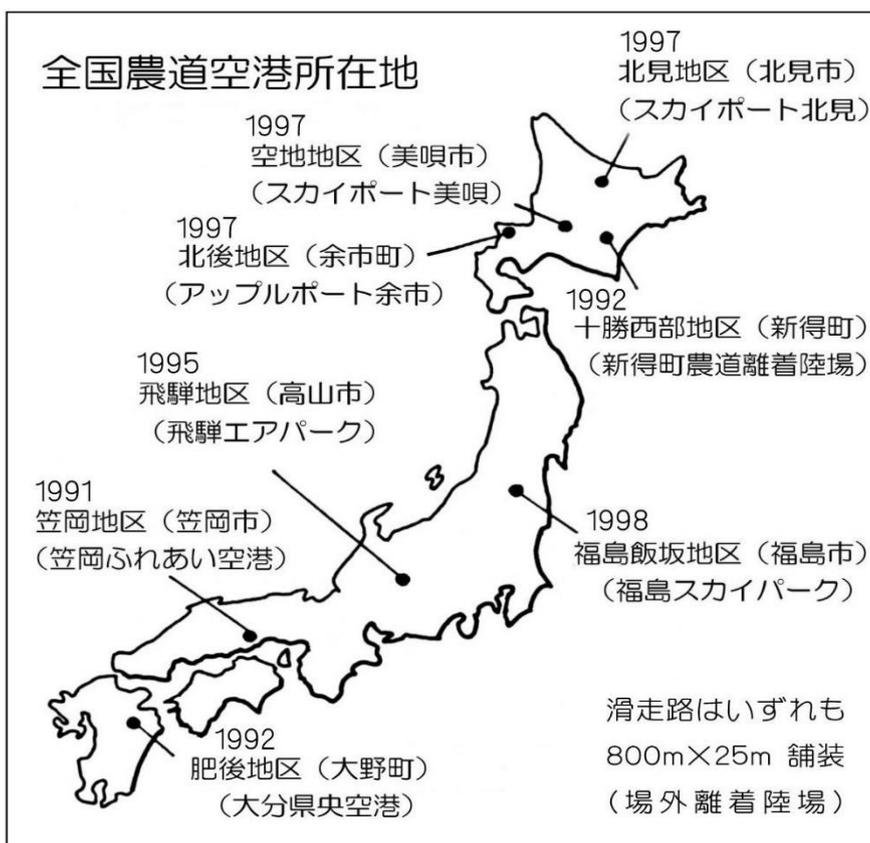


農道離着陸場（農道空港）

- 農道離着陸場（農道空港）整備事業は
- 1988 年（昭和 63 年）に開設された農林水産省の事業
- 農道を拡幅し、滑走路を設置して、離着陸場として利用
- 農産物の消費地への空輸で、地域農業振興を目指す目的で開設
- 空港の種別は飛行場外離着陸場、設備は 800m×25m の舗装滑走路
- VFR／昼間のみ運用（日出～日入りで、条例等で定められた時間）
- 1998 年（平成 10 年）の事業廃止迄に計 8 か所が建設された
- 運用開始当初は農産物の空路運送を試行、しかし、
- 運送の量とコストと定時性の面から陸上輸送には対抗できず
- 有視界飛行のみでは、昼間収穫、夜間輸送、朝市場には無理があり
- 航空輸送としての優位性を見出すことはできずに
- 農道空港運営協議会は事業継続困難として 2008 年に解散
- 以降、農道空港施設の維持は、地方自治体の事業となり
- 滑走路等施設の多面的*1（多目的*2）な有効活用を目指し
- 現在も航空機に限らず様々な事業での利用が存続

*1：農業に何らかの形で関連している利用 *2：多岐にわたる利用



農道空港の例



笠岡ふれあい空港



飛騨エアパーク

全国農道空港（農道離着陸場）一覽

離着陸場の名称 (通称)	所在地 (管理者)	滑走路 (運用期間)	開設
北見地区農道離着陸場 (スカイポートきたみ)	北海道北見市 (北見市役所農林商工部耕地林務課)	10/28 (5月-12月)	1997年10月
中空知地区農道離着陸場 (スカイポート美唄)	北海道美唄市 (指定管理者：ピートエア)	02/20 (5月-11月)	1997年10月
北後志地区農道離着陸場 (アップルポート余市)	北海道余市郡余市町 (経済部 商工観光課)	04/22 (5月-10月)	1997年9月
十勝西部地区農道離着陸場	北海道上川郡新得町 (運営者：西十勝フライト農業公社)	17/35 (5月-12月)	1992年7月
福島市農道離着陸場 (ふくしまスカイパーク)	福島県福島市 (指定管理者：特定非営利活動法人 ふくしま飛行協会)	14/32 (4月-12月)	1998年4月 最後に開設の農道空港
飛騨農道離着陸場 (飛騨エアパーク)	岐阜県高山市 (一般社団法人飛騨エアパーク協会)	10/28 (4月-12月)	1995年6月
笠岡地区農道離着陸場 (笠岡ふれあい空港)	岡山県笠岡市 (笠岡市役所 産業部 農政水産課)	03/21 (通年)	1991年10月 最初に開設の農道空港
豊肥地区農道離着陸場 (現：大分県中央空港)	大分県豊後大野市 (大分県 県中央飛行場管理事務所)	03/21 (通年)	1992年4月 1997年飛行場に格上げ

農道空港(農道離着陸場)の現状 - 航空機の離着陸が可能な多面的(多目的)広場

離着陸場の名称 (通称)	現状と主な利用状況
北見地区農道離着陸場 (スカイポートきたみ)	ヘリコプターによる野鼠防除剤散布などの農業利用、各種イベント、スカイスポーツ、防災での緊急利用、緊急患者の搬送等、冬期閉場期間の、自動車メーカーによる寒地走行テスト等
中空知地区農道離着陸場 (スカイポート美唄)	多面的(多目的)な活用として、小型機の運用、農業用無人ヘリの運用、重機/自動車の走行テスト、防災ヘリ訓練等、ドクターヘリ運用、大規模風揚げ大会、自転車競技、スカイスポーツフェア、バイクミーティング等
北後志地区農道離着陸場 (アップルポート余市)	スカイスポーツ、体験飛行、各種イベント会場、ドクターヘリや防災ヘリの離着陸、自転車の耐久レース、ラジコンの練習、ライブコンサート、自動車の展示会場、車両の走行技能訓練等
十勝西部地区農道離着陸場	多面的(多目的)な有効活用を目指す動きはあるものの、地元議会では、施設をスカイスポーツ等で有効活用したい動きが、地元の反対に会う等、意識の相違が解決されず、現在に至っている状況。
福島市農道離着陸場 (ふくしまスカイパーク)	航空機の離着陸・訓練・遊覧飛行、ドクターヘリや防災ヘリの離着陸、曲技飛行練習、競技会、イベント等での利用、TVドラマ、カタログ等の撮影、ラジコン大会、音楽イベント、車・バイクの試乗会、公益的組織のテスト会場等
飛騨農道離着陸場 (飛騨エアパーク)	フライト農業による「飛騨ブランド」の確立、防災活動拠点、防災訓練、救急医療活動拠点、グライダー、モーターグライダー、ラジコン機の飛行、体験、競技会等を含む、各種イベントに利用
笠岡地区農道離着陸場 (笠岡ふれあい空港)	各種イベント、農業空中散布、防災活動、ラジコン飛行機の練習及び競技会、人力飛行機の試験飛行、自動車やバイクの試験、ヘリコプター訓練等、連日、何らかの利用予定が入っている。令和4年には、農道離着陸場のあり方委員会を立上げ、利用の再検討がなされている。
豊肥地区農道離着陸場 (現：大分県中央空港)	利活用向上のため平成9年に公共飛行場として再出発。県防災航空ヘリの基地として、防災・救急活動を行うほか、民間航空機の離発着、事業飛行、遊覧飛行、農作物の輸送等に利用

農道空港（農道離着陸場）の現状

税金の無駄遣いと批判された農道空港、その現状は

- 航空機の離着陸が可能な
- 800m×25mの舗装面を有する
- 多面的(多目的)広場としての活用により
- 地域の振興と活性化を目的とする
- 地方自治体の事業として存続
- 小型機の得難い貴重な活動拠点

農道空港に係る最近の動向、今後の見通しと期待

最近の傾向では、ドローン関連の訓練や、開発等の利用が目立ち、また、空飛ぶ自動車の開発、試験等の利用の動きもあるようです。

離着陸場本来の動きとしては、パイロット養成校誘致等の検討を進めている例もありました。しかし、多面的(多目的)活用等で、自由度があるように見えても、農道空港施設の維持と活用は、地方自治体の事業ですから、飛行訓練基地としての利用等、本来の目的とは大きく異なる運用については、地域住民の理解が得られない限り、実現はあり得ません。

また、地域の振興と活性化を目指す、他の多面的(多目的)活用との共存の問題も常に課題になります。

農道離着陸場は、小型機の得難い貴重な活動拠点としての存在ですが、それは、現状規模での小型機等の飛行が容認されているのみと考えるべきでしょう。

小型機用の公共飛行場が望めない現状において、農道空港は貴重な存在です。

航空機での利用に際しては、他の多面的(多目的)利用との共存を図りながら、安全を最優先とした、謙虚な姿勢が必要です。

加えて、施設運航者が、地域の方々と直接的に対話する姿勢が重要でしょう。

農道空港の例（ふくしまスカイパーク）



ふくしまスカイパーク指定管理者提供



農道空港から正規の飛行場になった大分県央空港